



株式會社論ニ就テ福田博士ニ答フ

上田, 貞次郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 16(4):577-590

(Issue Date)

1914-04

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052187>



株式會社論ニ就テ福田博士ニ答フ

東京高等商業學校教授

商學士 上 田 貞 次 郎

昨年九月號ニ「株式會社」ノ形式ト實質トイフ論文ヲ投ジタ所ガ、舊師福田博士カラ頗ル親切ナル批評十一月及十二月號連載ヲ受ケタコトハ余ノ非常ニ深ク謝スル所デアアル。郵便ノ往復ニ一箇月ヲ要シ、時計ノ示ス時刻ニ九時間餘ノ差ヲ存スル日本ト英國ノ間デ通信ヲ交換スルノハ執筆者ニ取テモ間ダレイガ讀者ニ取テハ尙更ノコト、推察スル。併シ折角批評ヲ受ケナガラ答ヘナイノハ先輩ニ對スル禮デナイト思フカラ不取敢此一稿ヲ起スコトニシタ。

今回ノ福田博士ノ駁論ノ内デ余ノ降參セザルヲ得ナイ點ガーツアル。夫ハ「予ハ實ニ教授ノ勇氣ト大膽トニ敬服セザル能ハズト雖モ學問ハ勇氣ト大膽トノミニテハ行ハレズ」學者ノ用意ハ極メテ慎重ニ其態度ハ極メテ溫和ニアラザルベカラズ」トイフ一節デアアル。如何ニモ余ハ自ラ顧ミテ驚ク程讀書ニ不熱心デアアル。實ヲイ

へバ今ノ時流ハ外國書崇拜ダトイフテ其弊風ニ憤慨スルノ餘リ、自分ノ不詮索ナル缺點ヲ忘レルコトモアルケレドモ、サレバトテ讀書ノ足ラナイノヲ誇トスル譯ニハ行カナイ。學而不思則殆、思而不學則罔トイフカラ余ノ如キハ罔ナルノ甚ダシキニ陷テ居ルノダラウ。實際ニ於テ先生ノ引カレタ佛國ノ學者リオン、カン及ルノ一ノ所論ハ未ダ研究シテ居ナイカラ從テ精緻ナル法律論ヲ戰ハス資格ハナイノデアアル。併シナガラ余ノ法律論ガ先生ノ銳利ナル論鋒ニ掛テ全滅ニ歸シタカトイハルレバ左程ニモ思ハナイ。マダ〱辯護スベキ餘地ガ充分ニアル。經濟論ニ至テモ敬服スル所ト爲ナイ所トアル。依テ以下簡條書ニシテ先生ノ論點ヲ一々捕ヘテ見ヤウ。

一 株式會社ノ特色ノコト 余ハ株式會社ノ特色トシテ株式制度、有限責任制度、重役制度ノ三點ヲ舉ゲ、タ處ガ先生ハ其選ビ方ガ當ヲ得テ居ラヌトシテ批難セラレ、レーマンノ說ヲ引テ株式會社ノ要件ハ(一)一定ノ目的ノ爲メニ多數株主ガ結社スルコト、(二)個人ノ財産ヨリ獨立セル會社基本資本、(三)此資本ヲ株式ニ分割スルコト、(四)有限責任デアルト注意サレタ。併シ此攻撃ハ余ノ所謂特色ノ意味ヲ誤解

サレタ結果ト思フ。余ガ株式會社ノ特色トイフタノハ他ノ種類ノ會社ト異タ所トイフ意味デアル。他ノ會社ノ要點ト株式會社ノ要點トヲ比較シテ其共通ナルモノヲ省キ相異アル所ヲ舉ゲタノデアル。サレバ株式會社ガ(一)會社デアルコト、(二)獨立ノ資本ヲ有スルコト、(三)杯ハイフ必要ヲ認メナイ。唯(三)資本ヲ株式ニ分ツコト、(四)有限責任ナルコト、ヲ舉ゲレバ宜シイ譯デアル。而シテ尙此外ニ内部組織ノ重要ナル相異點トシテ重役制度ヲ加ヘタノハ是亦特色トイフ意味ニ於テ爲シタノデアル。然ラバ此點ニ就テハ別ニ叱ラレル理由ハナカラウト信ズル。

因ニ重役制度ヲ株式會社ノ特色ト見ルコトハ余ノ新發明デナクシテアダム、スミスカラ考ヘ付タノデアル。

二 株式ノ自由賣買ノコト

自由賣買ヲ株式ノ法律上ノ要件トシタノニ對

シ福田博士カラ佛獨ノ學者中ニ異說ノアルコトヲ注意サレタガ是ニ就テハ最初ニ述ベタ通り余ノ研究ガ足りナイカラ全ク降參スルヨリ外ハナイ。加之事實ニ於テ私會社ノ株式ガ賣買自由ニ成テ居ラヌコトハ余ノ論文中ニモ記シタ所デアルカラ、是ヲ以テ法律上。絶對ノ必要條件ト認メルコトハ余自身ニ於テ前後矛盾デア

ル。併シナガラ株式カラ自由賣買トイフコトヲ取去タナラバ他種ノ會社ノ持分ト餘リ違ハヌモノニ成テシマフ。殊更ニ株式トイフ特別ノ名稱ヲ付スル必要ガナクナツテシマヒハセヌカ。然リトスレバ何人ノ說ヲ以テシテモ恐ラク株式ハ自由ニ賣買サルベキヲ原則トシ、賣買自由ナラサルモノヲ例外トスルコトデアラウ。自由賣買トイフコトハ法律上絶對ノ必要條件デナイトシテモ尙ホ是ヲ特色ノ一トシテ有限責任ト竝ベルコトハ不當デナカラウト思フ。

尙福田博士ハ株式ノ特質ハ其利子證券デナクシテ利潤證券タルニアリト主張セラレテ居ル。至極賛成トイフ外ハナイガ、併シ是ハ株式ト債券トヲ比較サレタ場合ノ論デアツテ株式ト持分トヲ比較サレテノ論デハナイ。余ハ株式會社ヲ他種類ノ會社ト比較シテ其特色ヲ捕ヘント試ムルノダカラ持分ト株式トヲ對照シテ見ナケレバナラナイ。此場合ニハ兩方トモ利潤ニ對スル權利デアル。證券トシテ自由ニ賣買サル、所ガ株式ノ特色デアルトイハチバナルマイ。是モ先生ノ見當違デハアルマイカ。

三 株式會社ノ祖國ノコト及有限責任ノコト

余ガ株式會社ノ祖國タル英

國云々トイフタニ對シテ福田博士ハ法制史上ノ事實ニ違フト攻撃サレタ。成程史實ノ上デ初メテ株式會社ノ出來タノハ和蘭ノ東印度會社デアツテ英國ノハイハTrustニ對スルGegentrustデアル。又歐洲大陸諸國ノ法制ガ佛國ノ「コード」ニ倣タコトモ御説ノ通リデアル。余モ近著株式會社經濟論中ニ同ジ事ヲ書テ置タノデアアル。（余ハゼノアノ「セント、ヂョーヂス、バンク」ヲ株式會社ト見テ居ラナイ。併シナガラ歴史上ノ單一ナル事實又ハ紙上ノ法律ヲ離レテ實際ニ盛ニ此法制ノ應用サレ初メタノハ英國ニ相違ナイノデ、是丈ノコトハコンラードノ辭書ヲ引テモ分ルノデアル。而シテ此事實ニ基テ英國ヲ株式會社ノ祖國トイフコトハ何ノ不思議モナイデハナイカ。

併シ假リニ百步ヲ讓テ祖國云々ハ不當ナリトシテモ余ガ有限責任ヲ株式會社制度ノ古今ニ通ズル要件ト認メナイ理由ハ動カナイ。福田博士ハ飽ク迄モ佛國ノ「コード」ニ基テ株式會社ノ特色ハ有限責任ニアリトシ英國ハ傍系ダカラ論ズルニ足ラスト主張サレルケレドモ夫デハ議論ニナラナイ。傍系デモ例外デモ是程著シイ事實ヲ度外視シテ株式會社法制史ヲ論ズル譯ニハ行カナイ筈デアアル。例ヘバ羊

ハ概シテ白イケレドモ黒イノモアル。然ルニ「白イノガ正系デ黒イノハ傍系ダ、故ニ羊ハ白イモノトシナケレバナラヌ、黒イノハ羊デナイ」トイフモノガアツタラ誰デモ笑フダラウ。福田博士ノ説ハ多少其氣味ガアリハセヌカ。

因ニ博士ハ「古イコトヲイフナラ何故十七世紀ノ和蘭マデ行カナイカ、何故一八五六年ノ英國ニ彷徨スルカ」ト突込マレタ。併シ余ノ議論ノ傍證トシテハ少シモ古ク珍シキヲ貴ブ理由ガナイ。經濟史上ニ顯著重要ナル事實ヲ求メタイノデアアル。博士ハ余ノ「眞意測リ難シ」トイハル、ケレドモ、余カラ見レバ博士ノ「眞意測リ難シ」トイヒタクナル。是ハ余ガ大陸法制史ヲ知ラナイカラ負けニイフノデハナイ。

四 重役制度ノコト及會社道德ノコト 余ハ「重役ナケレバ株式會社ハ成立

セヌ」トイフタ。是モ歴史ヲ無視スルノ甚ダシキモノトシテ論難サレタノダガ余ニ於テハ服シ難イ。株式會社ガ合名會社杯ト異リ、當該事業家ナラヌ一般公衆ノ資本ヲ吸收スル爲メニ設ケラル、限リハ決シテ重役トイフ一機關ヲ省ク譯ニ行クモノデナイ。先生ハ和蘭ノ東印度會社ノ事ヲ例ニ引カレタガ此會社ハ初メ東印度貿易商ノミヲ重ナル株主トシテ居タカラ特ニ重役ヲ置カナカツタケレドモ、會社經

營ノ任ハツマリ少數大株主ノ手ニ落チタト記憶スル(今參考書ガ手許ニナイカラ記憶ノミニ基テ立論スルガ間違ガアツタラ御容捨ヲ願フ)是ハ寧ロ重役制度ノ缺クベカラザルコトヲ證スルモノデハアルマイカ。而シテ此重役ニ事業ヲ一任スルコトガ原因ト成テ怠慢、浪費、遲鈍、不正ヲ生ジ易ク、此點ニ於テ個人企業又ハ合名會社、杯ニ對シ一籌ヲ輸スルノ恨アルコトハ議論ノ餘地ガナイ。株式會社ガ Routinen-
mässigノ事業ニ適當スルコトモ余ニ取テハ明白ナル事實デアル。博士ハ此等ノ說ガ
アダム、スミスノ「謬說」ニ基テ其後ノ經濟學教科書ニ記載セラレル様ニ成タトイハ
ル、ガ、是ハ左様ノ次第デナイ。凡ソ株式會社ニ此ノ如キ缺點ノアルコトハ現在目
前ニ見ル活事實デアツテ吾々ハアダム、スミスノ本ヲ讀マナイデモ自然ニ思付ク
ベキコトナノデアル。事實上ノ證文ハ不必要ト思フ。

次ニ「會社道德」ノ進歩ニ依テ重役制度ノ缺點ガ減少シツ、アルト云フタニ對シ
テモ博士ハ異論ヲ挾マレ「歷史上ノ事實ハ説明ヲ單ニ道德ノ進歩ニ歸ス、便ハ即チ
便ナリト雖モ此ノ如キコトガ果シテ學問上ノ眞面目ナル敘述トシテ受取ラレ得
ルカ」トイフテ、サモ余ガ不眞面目デアル様ニ叱ラレタケレドモ、余ハ決シテ漠然ト

道德ヲ持出シタノデナイ。會社ノ重役ガ個人企業ノ心理ニ動イテ居ル間ハ弊害ガ多イケレドモ會社制度ノ普及ニ伴テ重役ノ株主ニ對スル責任ガ明カニ成テ來レバ其處ニ一種ノ新道德ヲ生ジ重役ノ廉潔勤勉ノ風ヲ養フ様ニナルト思フノデア
ル。此點ハ余ノ著書ニ稍詳シク述べタ積リデアル。

因ニ余ガ此論點ニ考付タノハマーシャルノ經濟原論ヲ讀ダ時デアル。

五 企業者職分分割ノコト

獨逸ノ學者間ニハ株主ガ株式會社事業ノ企業

者デアルカ、又ハ重役ガ夫デアルカトイフ論爭ガアルケレ共余ハ其雙方ガ舊來ノ個人企業ニ捕ハレタル說ダト思フ。余ハ株式會社ニアリテハ企業者ノ職分ガ株主ト重役トノ間ニ分割サレテ居ルトイフタ。是ニ就テ福田博士ノ攻撃ハ次ノ通り。曰ク汝ガ從來ノ諸說ヲ以テ捕ハレタル說ト見ルハ宜シイガ、企業者職分ノ分割トイフコトモ同ジク捕ハレタル說デハナイカ。何故一步ヲ進メテ株式會社ノ企業者ハ會社其者デアルトイハナイカ。合名會社合資會社ハ自然人格ト結ビ付テ是ト離レルコトガ出來ナイケレドモ株式會社ナラバ株主ヤ重役ノ變更ニ關係ナク完全自立ノ人格ヲ有テ居ル。是ガ有限責任カラ生ズル斯ノ最重要ノ點デアル。ソコデ博士

ハギールケ氏ヲ引テ今日ノ世ノ中ニ企業者ヲ自然人ニノミ限ラントスルハ時勢
後レダト斷定サレタ。

此御説ニハ余ハ少カラズ考ヘサセラレタ。而シテ結局大體ニ於テ賛成セザル得
ナイコトニ成タ。實ハ本誌九月號ニ載セラレタ余ノ論文即チ今回福田博士ノ批評
ノ目的ト成タモノ、内デ有限責任ノ經濟上ノ重要ニ關スル部分ハ急イデ執筆シ
タ爲メニ充分余ノ説ヲ盡シテ居ラナカツタノデアル。余ノ考デハ有限責任ハ企業
ヲ個人ノ經濟カラ全然取り離シテ獨立ノ組織生命ヲ保タシムル點ニ於テ企業ノ
發展史上ニ重要ナル意味ヲ有スルモノデアル。企業ハ家族經濟カラ漸次ニ分化シ
テ純然タル營利ノ機關トナルノデアルガ個人企業又ハ合名、合資會社ニアリテハ
マダ――企業者タル個人ノ經濟カラ全然脫化スルコトガ出來ナイ。夫ハ持分ノ賣
買不自由ナルコト、其無限責任ナルコト、ガ然ラシムルノデアル。夫ダカラ有限
責任ハ企業ト企業者ノ個人經濟トノ間ニ通ズル最後ノ一絲ヲ斷テ企業ヲ完全ニ
分化セシムルモノト見ルコトガ出來ル。此考ハ余ノ著書ノ方(株式會社ノ形式ト實
質ト題スル章)ニハ明白ニ書テ置タツモリデアル。

ソコデ此ノ如ク株式會社ノ特色ヲ完全獨立ノ企業組織トシテ考ヘルコトニナレバ其企業者ノ何人ナルカトイフ問題ニ對シテモ亦會社ヲ組織スル所ノ個人タル誰レ彼トイハズシテ舊來ノ意味ニ於ケル企業者ハ無ク成タノダトイフ方ガ適當デアル。即チ單ニ企業者ノ職分ガ分割。サレタトイフヨリモ企業者ガナクナツテ其職分ハ或一ノ組織ニ依テ行ハレル様ニ成タ、而シテ其組織ニハ出資ノ危險ヲ負擔スル株主ト事業ノ經營ニ任ズル重役トガアツテ右ノ職分ヲ分擔スルコトニ成テ居ルト。此ノ如ク說タ方ガ適當デアル。何トナレバ余ガ企業者職分ノ分割トイフノハ職分ガ甲乙二ツニ分レテ甲ハ甲、乙ハ乙ト別々ニ働テ居ルトイフ意味デハ無論ナイ。其處ニハ分化ト共ニ合成ガ行ハレテ一ノ調和シタル働ヲ爲ストイフノデアル。然ラバ余ノ意見ハツマリ福田先生ノ意見ト同ジ所ヘ落チテ行カチバナラヌ唯先生ノ論トシテハ如何カト思ハレルノハ法人ヲ企業者ト呼ブコトデアル。法人タル會社ガ即チ企業者ナリトイフノハ經濟論トシテ一寸受取り難イ。併シ是ハ言表シ方ノ問題ダカラ後廻シニシテモ差支アルマイ。即チ此一點ニ於テハ余ハ大體ニ於テ先生ノ御說ニ賛成スルトイフ次第デアル。

因ニ余ノ企業者職分分擔論(分割論)デナイヲ捕ヘテ教授ノ文リ氏ノ文誠ニ類似スルヨリ察スレバ教授ハリ氏說ヲ採ラレシカ云々ト推論サレタノハ余ニ取テ迷惑少カラズダ。余ノ分擔論ハ一二年前ニ自分デ考ヘ出シタノデリーフマン氏ノ書物ノ出ル前カラ人ニ語タコトモアル(リーフマン氏ノ書物ハ實ハマダソコマデ讀デ居ラナイノデアル)而シテ活動企業者ト不活動企業者トイフ語ハシュモラーノヲ採用シタノデアル(是ハ論文中ニ斷々通りダ)余ハ他人ノ新シイ思想ヲ採用スル場合ニハ必ず正直ニ借用ノ旨ヲ斷ルツモリデ居ルノニ右ノ如ク無斷借用ノ冤罪ヲ蒙タノハ頗ル不服デアル。今後ハモ少シ福田先生ノ信用ヲ得タイモノダ。呵々

六 株式ノ讓渡ハ自由ナルベキコト

余ハ株式制度ト自由讓渡トヲ離ルベ

カラザルモノト見テ居ル。然ルニ福田博士ハレーマン氏ヲ持出シテ自由讓渡ノ必ズシモ必要ナラザルコトヲ説明サレタ。是ハ法律論トシテナラバ前ニ述べタ通り服従スルケレドモ經濟論トシテハ到底受取レナイ說デアル。株式ガ持分ノ如ク賣買讓渡ノ不自由ナルモノデアルナラバ株式會社ハ今日ノ如キ發達ヲ遂ゲル謂ガナイ。株式ガ市場賣買ノ目的物デアレバコソ株式會社ガ他種ノ會社ト違テ一般公

衆ノ放資機關トナリ、從テ大資本ヲ集メ大事業ヲ起スノ力ヲ有スルノデハナイカ
博士ハ曰ク「株式ノ放資ハ女子ヲ嫁セシムルガ如シ、一度出デ、ハ復タ歸ラザルヲ
原則トス」余ハ思フ、ソシナ事ハ斷ジテナイ。株式ノ放資ハ桂庵カラ女中ヲ雇フガ如
シ、何時デモ取替ラル、ヲ原則トス。是ガ株式ノ持分ト異ル所デアル。事業ノ側カラ
見レバ株式ハ持分ト同ジク永久ニ固定スルケレドモ放資者ノ側カラ見レバ流動
自在デアアル。即チ事業ニ對スル放資ヲ公債ニ對スル放資ノ如ク流動自在ニスルノ
ガ株式會社ノ最大特色デアアル。博士ハ利潤ニ對スル權利ニ甚ダ重キヲ置カレテ居
ル。是ハ株式ヲ他ノ證券ト比較シテイハル、ナラバ余モ同感デアアル。併シ株式ノ株
式タルハ單ニ利潤ニ對スル權利ヲ代表スルノミデナイ。持分ヲ化シテ賣買自在ノ
證券ニスルコトヲ考ヘナケレバナラス。博士ハ曰ク株式會社ノ歴史ニ遡テ見レバ
此制度ハ初メ冒險的ナル海外貿易ニ應用サレタノデアアル。放資ノ比較的安安全ナル
恒久的事業ニ應用サレタノデハナイ。故ニ株式會社ノ株式會社タル所ハ冒險的ナル
利潤ヲ追ハントスル企業的精神ニアル。元本ノ得喪ヲ顧慮スル様ナモノニ株式
會社ガ出來ルモノカ、上田ノ說ノ如クンバ企業トシテノ玄奧ノ活力ヲ窺フコトハ

出來ヌト。然ルニ余ハ思フ。株式會社モ企業ナル以上ハ利潤ヲ求ムル精神ニ依テ動クノハ當然ナコトデアアル。併シ是ハ他ノ會社乃至個人企業デモ同ジコトデアアル。獨リ株式會社ガ他ノ會社ト異タ。勸ヲスルノハ利潤ノ證券化ノ力デアアル。歷史上ノ事實カライヘバ最初ノ株式會社ガ主トシテ危險ナル未開地ノ貿易事業ニ從事シタコトハアダム、スミスモ書テ居ル。余モ知テ居ル。併シ夫故ニ株式會社ガ冒險事業ノミニ適スルトハイヘナイ。是ガ株式會社ノ本領ダトイヘバ持テノ外ノ事デアアル。元來株式會社ハ多數ノ資本家ヲ集メルモノデアアルカラ危險分擔ノ手段トシテ適當デアアル。此意味ニ於テ昔ハ海外貿易ニ應用サレタ。今デモ新發明ノ機械ヲ半バ試驗的ニ製造販賣スル如キ場合ニ用ヒラル、コトガアル(此場合ニハ大抵私會社ノ形ヲ取ル)併シ株式會社ノ一層大ナル功績ハ大資本ヲ集メテ大事業ヲ營ムコトデアアル。歴史ノ初ハ何ウデアツテモ歴史ノ大勢ヲ通觀シテ見レバ株式會社ノ本領ハ彼ニアラズシテ此ニアルコト疑ヲ容レナイ。而シテ此本領ノ根據ハ何處ニアルカトイヘバ資本ノ證券化(利潤ノ證券化トイフテモ此處デハ同ジコトニナル)デハナイカ。企業ノ資本ヲ政府ノ借債ト同ジク動化シテ一般公衆ノ放資ニ適セシムルコト

デハナイカ。一般放資家ハ福田先生ノイハル、様ナ大膽ナモノデハナイ、極メテ臆病ナモノデアル。元本ノ喪失ヲ恐レルモノデアル。併シ是ト同時ニ收益ノ多カランコトヲ望ムノデアル。從テ中ニハ多少ノ危險ヲ冒スコトヲ辭セナイモノガ大勢アル。彼等ハ利子ニ満足シナイデ利潤ヲ求メル。併シ普通ノ事業ハ資本ヲ固定サセルカラ怖シクテ手が出セナイ。ソコデ株式ガ人望ヲ得ルノデアル。此株式會社ニ特有ナル事實ヲ無視シテ企業ノ通有性タル利潤追求ヲ説クナラバ夫ハ企業心理ノ玄奥ナル所ヲ窺フコトガ出來ルダラウケレドモ肝腎ナ株式會社ノ真相ヲ了解スルニ至ラヌダラウト思フ。

以上稿ヲ終テ一讀スレバ用語ノ不穩當ナ所ガ少クナイ。先輩ニ對シ、特ニ舊師ニ對シ敬意ヲ失セヌカラ恐レル節モ多イ。併シ議論ハ遠慮スルトツマラナクナルカラ此マ、投函スルコトニシタ。福田博士ニ對シテハ何ウカ其飾ナキ言ヲ答メズシテ正直ニシテ無邪氣ナル精神ヲ買テ下サル様ニ幾重ニモ御願スル次第デアル。